

# Satpuruṣa考\*

渡 辺 章 悟

## 序

大乘仏教の菩薩を表す言葉にサットプルシャ (Skt. satpuruṣa, P. sappurisa) という語がある。この「善き人」good or worthy or true man を意味する語は、すでに原始仏典、特に偈頌の中でしばしば見られる。たとえば同じ sappurisa [dāna] sutta (「善士経」) でありながら、『増支部』(AN) では、家庭を持ち、修行者に布施する<在家の仏教信者>とし、『中部』(MN) では、自らを誇らず他を蔑まない、すぐれた<比丘>のことであるとする。さらにブツダを意味したり、預流や不還などの有学の聖者とする例もある。そしてこの用法は、『婆沙論』や『俱舍論』などのアビダルマ文献にも継承される。

このように、ある場合には在家者であり、あるいは出家者として描かれる sappurisa (satpuruṣa) は、*Mahāvastu* 『大事』のような仏伝文学を経由して、大乘仏教になるとさらに一般化し、善男子 (kulaputra) や菩薩 (bodhisattva) と同義で用いられ、大乘仏教の伝承者として一定の役割を持つようになる。

この伝承はさらに展開して、多くの大乘経典には一群の菩薩としてリスト化される。『法華経』や『三昧王経』のように、対告衆としての菩薩が列挙された直後に、在家の菩薩として別に描かれるようになり、具体的にバドラパーラ (bhadrāpāla) などの十六人の固有の善士 (正士、賢士、丈夫) という伝承が確立する。

本稿では bodhisattva, kulaputra 等の語と比較しながら、この satpuruṣa の概念が、初期仏教から大乘仏教に至る過程でどのように変遷したのかをあきらかにする。その考察を通じて、大乘仏教の伝承者の姿を解明することとしたい。

## 1. 初期仏典における sappurisa

パーリの毘奈耶には sappurisa の用例はほとんど見られない。その数

(2)

少ない例を見ると、世尊がアーナンダに対して「汝等善き者は」と呼びかける例 (*Vinaya* 1.7)、多くの比丘を殺害したことを後悔する鹿杖 (*migalaṇḍika*) 比丘に対して、魔神が「その〔利益に〕よって多くの功德を追求している。善き人よ。汝は未だ渡らざる者を渡すのである」と褒め称えた例 (*Vinaya* 1.69) がある程度である。このように、比丘への呼びかけとして *sappurisa* といわれる以外、ほとんど見るべきものはない。ここでは初期仏教の代表的な *sappurisa* として、*Dhammaṭṭapaḍa* の二つの例をあげておく。(以下、出典はすべて PTS の巻数、頁数の順で記す。)

花の香りは風に逆らっては進んでいかない。旃檀もタガラの花もジャスミンの花もみなそうである。しかし、善き人々の (*satam*) 香りは、風に逆らっても進んでいく。善き人 (*sappurisa*) はすべての方向に薫る。

na pupphagandho paṭivātam eti na candanaṃ tagaramallikā vā  
sataṅca gandho paṭivātam eti sabbā disā sappuriso pavāti. 54  
(*Dhammaṭṭapaḍa*, *KhN* 8)<sup>3</sup>

賢者・智者・博学の人・堅忍の人・持戒者・聖者、そのような善き人 (*sappurisa*)、賢者に従うべきである。あたかも月が星宿の道を動くように。

dhīraṃ ca paññaṃ ca bahussutaṃ ca dhorayhasīlaṃ vatavantam  
ariyaṃ taṃ tādisaṃ sappurisaṃ sumedhaṃ bhajetha  
nakkhattapathaṃ ca candimā. 208

(*Dhammaṭṭapaḍa*, *KhN* 31)

以上のように、賢者 (*dhīra*) 等の総称が善き人 (*sappurisa*) であり、修行者の目標、リーダーと見なされ、その地位は高い。*Sappurisa* には在家者と出家者の二つの用法がある。たとえば、在家者の代表例として、以下の二つの『相応部』(*SN*) の詩文を見ておく。

大王よ、善き人 (*sappurisa*) は莫大なる富を得て、自らを楽しませ、

喜ばせ、父母を楽しませ、喜ばせ、妻子、使用人、友人などを楽しませ、喜ばせる。(SN 1.90)

①母に孝養する人、②家長に仕え、③柔和な言葉を語り、④誹謗することなく、⑤慳貪を離れ (macchera-vinaya)、⑥真実を語り、⑦怒りを制御する〔等の七禁戒足 (satta vatapadāni) を行う〕人、彼こそ実に善き人 (sappurisa) なりと忉利天の神々は言う、と〔世尊は述べた〕。(SN 1.228)

上記のうち、特に後者の⑤については、最初に「生涯慳貪の垢を離れた心で家にとどまり、寛容にして常に施す準備をし、施捨を喜び、乞う者に従い、施し、分配することを楽しむべし」と世尊によって説かれていることから、sappurisa は明らかに在家者であることが確認できる。ただし、この在家者としての用例はあまり見られない。

次いで出家者としての sappurisa の例を見てみたい。この意味での例は、枚挙にいとまがない。その多くは、預流、不還の聖者として用いられる。以下、その代表的例をあげておく。

#### (1) 預流の聖者が入る位

「比丘たちよ、これらの法 (六根・六識・六境等) をこのように〔無常・変化・変異するなど〕信じ、信解するならば、この者は随信行者 (saddhānusārī) と言われる。かれは正性決定 (sammattaniyāma) に入り、善人地 (sappurisabhūmi) に入り、凡夫地 (putthujjanabhūmi) を超えている。彼は業を行って地獄・畜生・餓鬼界に生まれることがない。また、かれは預流果 (sotāpattiphala) を現証せずに死ぬことはない。比丘たちよ、これらの法がこのように、慧によって、量によって、理解し認められるならば、この者は随法行者 (dhammānusārī) と言われる。かれは正性決定に入り、善人地に入り、凡夫地を超えている。〔中略〕比丘たちよ、これらの法をこのように知り、このように見るならば、この者は預流者、破滅しない者、決定者、上位の覚りに趣く者と言われる」(SN 3.325)

(4)

このように、随信行者、随法行者、それぞれが正性決定・善人地に入り、凡夫地を超える。このように認知するのが預流者であるという。

(2) 不還の聖者

『中部』「善人経」には sappurisa について詳細に述べられている。本経では、ブツダがサーヴァッティイーに近いジェータ林のアナータピンディカ僧院の比丘たちに、善人の法 (sappurisa-dhamma) と不善人の法 (asappurisa-dhamma) とを説く。そこで善人の法とは、「高貴な家から出家したのではなくとも、①法の随法を実践し、②正しく実践し、③随法行者となるならば、彼はそこにおいて供養されるべきである」(no ce pi uḷārabhogakulā pabbajito hoti, so ca hoti dhammānu-dhammapaṭipanno sāmīcipaṭipanno anudhammacārī, so tattha puḷḷo)<sup>5</sup> とし、衣・托鉢による食事・座臥処・医薬品などの資具を得ることなどに言及することから、明らかに出家者を指している。

また、27項目に亘って上記の章句を繰り返すが、その項目の中には森林住の頭陀支を受持する者を始め、十二頭陀支が説かれ、四禪・四無色定・最後に想受滅 (saññāvedayita-nirodha) まで説かれる。この想受滅は、不還者 (anāgāmin)、漏尽者 (khīṇāsava) のみが入り、凡夫は入らない。したがって、善人法とは不還の聖者までの位を言うのであろう。

(3) ブツダあるいは高位の聖者としての sappurisa

次に預流や不還とは限定できないが、聖なる弟子に教えを説く指導者を sappurisa という例もある。

また比丘たちよ、聖なる弟子にして、聞があり、もろもろの聖者を見、聖者の法を熟知し、聖者の法によく導かれ、もろもろの善き人 (sappurisa) を見、善き人の法 (sappurisadhamma) を熟知し、善き人の法によく導かれ、思惟すべきもろもろの法を知り、思惟すべきでないもろもろの法を知る者がいる。(MN 1.9)

この例は、凡夫に対して聖なる弟子 (ariyasāvaka 有学の聖者) の生

き方を対照させて説く定型句である<sup>6</sup>。ここに述べられる聖者 (ariya) と善き人 (sappurisa) とは同義であり、この引用の後に、この仏弟子には欲・生存・無明の三つの煩惱が生ぜず、断たれるという。さらに、「これは苦である。苦の生起である、苦の滅尽である」と正しく思惟する。その人に有身見 (sakkāya-ditṭhi)・疑惑 (vicikicchā)・戒禁取 (sīlabbataparāmāsa) という三つの束縛 (tīṇi saṃyojanāni 三結) が断たれる<sup>7</sup>とする。つまりこれらは「見ることにより断たれる煩惱」であるから、預流道 (sotāpatti-magga) の聖者についての説明であり、その比丘が「善き人の教えに導かれる」というのであるから、「善き人」とはブツダあるいは高位の聖者であろう。

次の用例 (『長部』『結集経]) も同様である。ただしこれは「四預流支の第一」の中であげられる聖者であり、後の文献に類出するものである。

四つの預流支がある。(1) 善き人に親近すること、(2) 正法を聴聞すること、(3) 正しく思惟すること、(4) 法の随法を實踐することである。

cattāri sotāpattiyāṅgāni. sappurisa-saṃsevo, saddhamma-savaṇaṃ, yoniso-manasikāro, dhammānudhamma-paṭipatti. (DN 3. 227)

この引用では、善き人に近づくこと (sappurisasamseva) は、預流の聖者の第一条件となっている。続いて「ここに聖なる弟子は仏に対して揺るぎない信仰 (aveccappasāda) を備えている」とあることから、先の例と同じく sappurisa は、預流の聖者に教えを説くブツダのことであろう。この用例も『相応部』に複数見られる<sup>8</sup>。

#### (4) 七〔善〕士 (ブツガラ) 説

「七つの人趣と無餘涅槃とを私は教示しよう。〔中略〕彼にはその寂靜にして最上なる意味を持った言葉を、正慧を以て観察するが、彼はその言葉を完全には理解していない。彼には慢随眠が、有貪随眠が、無明随眠が、完全には捨断されていない。彼は五つの下分の結縛 (順下分結 pañcannaṃ orambhāgiyānaṃ saññojanānaṃ) を尽

(6)

滅している故に中間般涅槃者 (antarā-parinibbāyin), 再生して涅槃する者 (生般涅槃者 upahacca-p.), 無行般涅槃者 (asañkhāra-p.), 有行般涅槃者 (sañkhāra-p.) となるのである。同様に、彼は上流 (上に流れる性質ある者) にして色究竟に行く者 (uddhaṃsota akaniṭṭhagāmin) となるのである」。 (AN 4.70ff)

ANでは同類の七〔善〕人 (satta puggala) が何度か説かれているが<sup>9</sup>, 三結を尽くすまでは預流, 一來の聖者であり, 五順下分結を尽滅するのは不還以上の聖者である。したがって, ANでは不還の聖者が般涅槃するのである。ただし, 本経では puggala であり, sappurisa ではないが, 後述する北方アビダルマの文献には satpuruṣa として引用される。

## 2. アビダルマから大乘論書の satpuruṣa

### (1) 『婆沙論』の善士

『婆沙論』では善士とは正見をそなえ、結を断じた有学の聖者であり、七種類の次の生涯への生まれ行き (七善士趣) が示される。そして、これは預流・一來の聖者には説かないことを述べる。

「如契經說。佛告苾芻。有七善士趣。能進斷餘結得般涅槃。問云何建立七善士趣。〔中略〕問何故不說預流一來為善士趣耶。答應說而不說者當知此義有餘。有說。世尊此中以七善士趣讚美中子。〔中略〕是故不說預流一來。有說。本為差別預流一來。世尊說此七善士趣。謂彼雖得名為善士。如契經言云何善士。謂若成就有學正見。乃至正定法云何勝善士。謂若成就無學正見乃至正定。然其不得名善士趣。」『婆沙論』 (大正 27, no.1545, 877c21-879a 8)

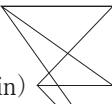
ここで有説として挙げるように、世尊は預流と一來との区別をするために七善士趣を説いたのであり、〔不還の〕有学が正見ないしは正定法を成就するなら、善士というのである。またここでいう「契経」とは、前述した『増支部』(AN 4.70ff)の七善士趣〔経〕(sattapurisagati-sutta)であるのは明らかである。このことは、以下の『俱舍論』の引用によっても確認できる。

## (2) 『俱舍論』の七善士趣 (sapta satpuruṣa-gati)

『俱舍論』「世間品」第三 (Pradhan ed., *AKBh.* p.122, 1.9ff.) でもこれを承けて、「不還は五つである。すなわち中般涅槃と生般涅槃と無行般涅槃と有行般涅槃と上流である」(*AKBh.* p.122, 1.4ff.) といい、さらにこの『増支部』の「善士趣」(satpuruṣa-gati) という経名をあげて引用する。

また、『俱舍論』「賢聖品」第六でもこの五不還説や九種不還説、さらに七善士説が詳細に分析されている。ここでは「どうして経中に七つの善士趣 (sapta satpuruṣagati-) が説かれているのか」云々といい、預流や一來にはない不還の般涅槃を解説する。以下にその善士趣の説を纏めておきたい。

・七種不還説と七善士趣説 (*AKBh.* p.361, 1.3ff. 『俱舍論』 大正 29, No.1558, 125a29ff)

- |                                  |   |                  |
|----------------------------------|---|------------------|
| ① 中般涅槃 (antarā-parinirvāyin)     |  | 速般 (速やかに般涅槃する)   |
| ② 生般涅槃 (upapadya-parinirvāyin)   |   | 非速般 (ゆっくりと般涅槃する) |
| ③ 上流涅槃 (ūrdhvasrota-parinirvāṇa) |   | 経久般 (久しくして般涅槃する) |

・九種不還説 (*AKBh.* p.360ff. 『俱舍論』 大正 29, No.1558, 125a)

- ① 中般涅槃 (antarā-parinirvāyin) — 速般・非速般・経久般の時間の区分の三種
- ② 生般涅槃 (upapadya-parinirvāyin) — 生・有行・無行の三種、色界に生まれて再生
- ③ 上流涅槃 (ūrdhvasrota-parinirvāṇa) — 全超・半超・遍没、色究竟天を最上とする。

これらは「速やかに般涅槃する」、「ゆっくりと般涅槃する」、「久しくして般涅槃する」という般涅槃の時間にしたがって、三つの中般涅槃者、三つの生般涅槃者、一つの上流〔不還〕というように、「七種の不還」

(8)

を区分する。あるいは、①～③ともに速般、非速般、經久般それぞれを三分して「九つの善士趣」に区分して注釈するが、いずれにしても不還の聖者を *satpuruṣa* とするのである。このように、不還の聖者という伝統が北方アビダルマに継承されているのが指摘できる。

(3) 四預流支の第一として

次に『婆沙論』や『集異門足論』などで、有学の修行法として四預流支が述べられるが、その第一として以下のように善士に親近することが述べられる。

四預流支者。一親近善士。二聽聞正法。三如理作意。四法隨法行。  
云何親近善士。答善士者。謂佛及弟子。〔『集異門足論』大正26, vol.1536, 393a11-13〕

これは先に引用した『長部』「結集經」に由来するものであろう。さらに「善士とは、仏及び〔その〕弟子を謂う」と明記することも重要である<sup>11</sup>。

(4) 大乘經論の *satpuruṣa*

同様の記述は以下の多くの大乘經論にも指摘される。特に「親近善士」に着目すれば、上記アビダルマ文献の成立と同時代にまでたどれる『三昧王經』(『月灯三昧經』)<sup>12</sup>にも見える。

本經には、「<すぐれた人を抛り所にする>とは、仏から離れないことであり、<すぐれた人に仕えること>とは、仏や菩薩や声聞に仕えることである」(*satpuruṣāśrayaḥ? yad idaṃ buddhāviraḥitaṭā. satpuruṣasamavadhānam? yad idaṃ buddhabodhisattvapratyekabuddhaśrāvakasevanāṭā*) [SR 299]。また、「<すぐれた人に親しく仕える>とは、仏に身を捧げることである」(*satpuruṣasamsevā? yad idaṃ buddhābhiniṣevitā*) [SR 300] とある<sup>13</sup>。このように、サットプルシャとは、仏あるいは菩薩や声聞をさすのである。

その他、四預流支及び親近善友 (*satpuruṣa-samsevā*) は、『大般涅槃經』<sup>14</sup>、『解深密經』<sup>15</sup>等の經典類や、『宝性論』・『仏性論』・『瑜伽論』・『大



乘莊嚴經論』・『顯揚聖教論』・『大乘阿毘達磨集論』・『成實論』など、唯識関連の文献を始めとする多くの論書に継承されてゆく。

就中、『長部』や『相应部』を始原とし、北方のアビダルマでも論じられる四預流支の第一「善き人に親近する」という用法に着目すれば、「善き人」が、仏・菩薩・声聞というように、大乘としては satpuruṣa に菩薩を読み込んでいることは注目されよう。

### 3. Mahāvastu の satpuruṣa

説出世部所伝の律蔵資料によって纏められた *Mahāvastu* (以下 *Mv* と略)<sup>16</sup> は、初期仏典にもとづいた非常に古い要素もあるが、4～5世紀頃の記述も見られるとされる。また、本書には初期大乘との深い影響関係も見られる。多くの大乘経典は本書の燃灯仏授記のテーマを組み込みながら新たな大乘の教理を構築していったのである。本書にも satpuruṣa について注目すべき記述が見られる。

本書 *Mv* には管見による限り、25 件の satpuruṣa の用例があり、その頻度も高い。そこでまず、最初に satpuruṣa の代表的例を取り上げて、その特徴を分析し、最後に般若経との重要なパラレルを指摘しておく<sup>17</sup>。

#### (1) 預流果の聖者

*Mv* における satpuruṣa は、ニカーヤに見られるのと同様、ブツダ或いは有学の聖者として用いられる。実際は有学の聖者としての用例は僅かであるが、その例外的なものとして次のような例がある。

人中の最高者にして仏法を畏れない人は、法に相應せる、一切の有情の善を彼に説けり。眷屬と共にその法を識別するや、王は三結を捨て去りて初果〔預流果〕を獲得せり。また、無数の人も初果を獲得せり。善き人たる王よ (satpuruṣā rājam)、慈しみの最高なる力を見るべし。(Mv 1.192)<sup>18</sup>

この引用で、「王は三結<sup>19</sup>を捨て去りて初果〔預流果〕を獲得せり」(trīṇi saṃyojanāṃ tyaktvā prāptavāṃ prathamam phalaṃ) といい、その王に対して「善き人たる王よ」(satpuruṣā rājam) と述べていることから、

(10)

satpuruṣa は預流果の聖者ということになる。したがって、この説はニカーヤにたどられるものであろう。

## (2) ブッダとしての satpuruṣa

*Mv* は最初にマハーカーティヤーヤナとマハーカーシャパの対論で十地説を概説する。その箇所において、第二地の菩薩たちは、第一の「優れた意向」(kalyāṇādhyāśaya) から第二十の「無限の意向」(anantādhyāśaya) までの二十種の意向 (adhyāśaya) を備えているとする。そして、この意向の最後に、「善き人 (satpuruṣa) にして最高の人 (puruṣottama) は、一切法に恐れを抱かず、この二十の清浄なる意向をみな備える。おお、頭陀法を遵守する者 (マハーカーシャパ) よ、実に菩薩たちは、この二十の意向を備えたものとなるのである」<sup>20</sup> と述べる。

冒頭の表現からすると、第二地の菩薩は、第二十番目の意向として「[最高の] 人 (puruṣottama) [になろうという] ことが述べられている。したがって、ここでいう善き人 (satpuruṣa) もブッダのことを指す<sup>21</sup> とみられる。

*Mv* ではこの他にも多くのブッダの異名が述べられる。たとえば、獅子のような人 (puruṣasiṃha, narasiṃha)、最上なる人 (puruṣarṣabha)、最勝なる人 (agrapuruṣa)、この上なき人 (agrapudgala)、大悲を持つる牟尼 (mahākāruṇiko muni)、偉大なる牟尼 (mahāmuniḥ)、無限の喜悦者 (anantavūdagra) などである<sup>22</sup>。また、ブッダの十号も多く見られるが、それは satpuruṣa とは直接関連しないのでここでは取り上げない。

## (3) 菩薩の定型表現

次に燃灯菩薩について、幾つかの尊称を用いて讃える定型表現が見られる。そのなかにサットプルシャが用いられるのである。これは菩薩 bodhisattva がブッダの前生を指す語として登場し、やがて部派文献や大乘仏教などで、悟りを希求する修行者という普通名詞に変わっていったのと同様の变化である。燃灯菩薩を介して列挙される *Mv* の用例は、その変遷の初期的な根拠として注目される。

「また彼（燃灯菩薩）は、… 理解力を持ち、念を持ち、堅固で、慧を有する、①象のような人、②獅子のような人、③牡牛のような人、④赤蓮華のような人、⑤白蓮華のような人、⑥重荷を背負う人、⑦〔メール山のような〕人、⑧善き人、⑨高貴な生まれの人、⑩無上なる〔人〕、⑪調御丈夫、⑫理解力がある人、⑬記憶力のよい人、⑭堅固な人、⑮知ある人が、いつでもどこでも、知るべきであり、獲得すべきであり、覚るべきであり、正等覚すべきであるものは、どんなものでもすべて、〔獲得し、覚り、正等覚して〕、一心刹那に結びついた般若によって、無上正等菩提を現等覚したのである。(yat kiṃcit puruṣanāgena puruṣasiṃhena puruṣarṣabheṇa puruṣapadumena puruṣapuṇḍarīkeṇa puruṣadhaureyeṇa puruṣeṇa satpuruṣeṇa puruṣājāneyena anuttareṇa puruṣadamyasārathinā gatimena smṛtimena dhṛtimena matimena sarvaśo sarvatratāye jñātavyaṃ prāptavyaṃ boddhavyaṃ abhisamboddhavyaṃ sarvantam ekacittakṣaṇasamāyuktayā prajñayā anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddho //) (Mv 1.229)

この引用箇所には燃灯仏菩薩の十五の異名が列挙されている。これらの一つ一つは菩薩、或いはブツダの異名として単独で用いられるものであるが、このような纏まった形式は他にはあまり見られない。そもそもこの引用箇所は、アルチマツト王の息子ディーパンカラ（燃灯）が、菩薩として燃灯仏となり成道する場面である。

これはブツダの成道を描く際の定型的章句となっており、Mvには同類のものが他に三例（後の表参照）ある。第一例に較べると後の三例はさらに異名の数も多くなるが、すべてガウタマ・ブツダの降魔成道の場面であり、satpuruṣaは「ブツダとなる菩薩」を指しているといえよう。

また、これに続く「一心刹那に結びついた般若によって、無上正等菩提を現等覚したのである」(ekacittakṣaṇasamāyuktayā prajñayā anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhaḥ) という成道に関する表現が、Mvでは四例ともに satpuruṣaに関連する章句の最後に見られ、定型的表現となっているのである<sup>23</sup>。

注目されるのは、下線部の satpuruṣa を含む十五からなる一連の〔燃

灯) 菩薩の尊称表現が、『八千頌般若』(Vaidya [Ast 1960:165-166]) を始めとする幾つかの初期大乘經典に継承され、最後の成道に関する定型文も複数の拡大般若經に引用されることである。このように、*Mv* と般若經の影響関係が *satpuruṣa* を通じて具体的に指摘できるのである。

#### 4. 般若經の *satpuruṣa*

##### (1) 『八千頌般若』(*Aṣṭ*) の *satpuruṣa* の並列表現

本經には、*satpuruṣa* は *asatpuruṣa* (一例) を含み、わずか三例にすぎない。その中で *Mv* の燃灯菩薩の十五種の異名と同類のものが見られるので、以下に引用しておきたい。

「不退転の菩薩摩訶薩は (*avinivartanīyo bodhisattvo mahāsattvaḥ*)、家庭の中に住んでいて、あれこれの欲望の対象を享受しても、捜し求めず、むさぼらず、執著しないで、それらの欲望の対象を受ける。… 彼らは家庭の中に住んでいるときにも、ときには正常な、ときには正常でない〔方法では〕生計をはからない。不正な方法でもなく、正しい方法でのみ生計をはかる。… なぜかという、彼らは①善き人たち、②偉大な人たち、③最上なる人たち、④雄々しい人たち、⑤端正なる人たち、⑥牡牛のような人たち、⑦崇高なる人たち、⑧誇り高き人たち、⑨英雄たる人たち、⑩重荷を負った人たち、⑪赤蓮華のような人たち、⑫白蓮華のような人たち、⑬高貴な生まれの人たち、⑭象のような人たち、⑮獅子のような人たち、⑯調御丈夫たちであって (①*satpuruṣair* ②*mahāpuruṣair* ③*atipuruṣaiḥ* ④*puruṣapravaraiḥ* ⑤*puruṣaśobhanaiḥ* ⑥*puruṣarṣabhaiḥ* ⑦*puruṣodāraiḥ* ⑧*puruṣaśauṭīraiḥ* ⑨*puruṣapuṃgavaiḥ* ⑩*puruṣadhuryaiḥ* ⑪*puruṣapadmaiḥ* ⑫*puruṣapuṇḍarikaiḥ* ⑬*puruṣajāneyaiḥ* ⑭*puruṣanāgaiḥ* ⑮*puruṣasimhaiḥ* ⑯*puruṣadamyasārathibhiḥ*)、あらゆる衆生に最高の安樂を享受させるはずなのである。

スプーティよ、家庭の中に住んでいる菩薩摩訶薩たちはこのようであるが、それは般若波羅蜜の力に満たされているからである。スプーティよ、これらの形状、これらの特徴、これらの根拠をそなえ

ている菩薩摩訶薩たちは、無上正等正覚から退転することがない、と考えられるのである。」(Vaidya ed. [Aṣṭ, 1960:165-166])

この引用のように、般若経では satpuruṣa (人中善士) は、不退転の在家の菩薩で、般若波羅蜜を行ずる菩薩のことを言うのである。ただし、この一連の尊称表現は、小品系の漢訳では『道行般若』・『大明度経』・『小品般若』といった古い漢訳に見られず、玄奘訳『大般若経』「第四会」「第五会」と『仏母般若』という新しい漢訳にのみ確認できる<sup>24</sup>。その中の『仏母』に依れば、不退転菩薩であって在家の菩薩として、最初の「正士」以下「調御者」までの13名をあげる。この『仏母』のリストは、梵本のリスト16名と内容も順番も最も近い。

このように、この定型的表現は小品系の伝統でも最初期に見られるものではなく、次第に不退轉で在家の菩薩の呼称とされていったのである。しかも、梵文『二万五千頌般若』やその漢訳諸本等には対応箇所が見られないので、この定型句は般若経全体での広がりを持っていない。その理由として、本経ではサットプルシャは在家の菩薩ということで、このようなブツダの別称ともされる一連の呼称が避けられた可能性がある。

またこの『八千頌般若』では、*Mv* (1.229) の15種に較べて16種と詳細になっており、名前が一致しないものもあるが、*Mv* の15名のうち9名を含んでいることから、両者の関連は無視できない<sup>25</sup>。以下、ブツダ或いは菩薩の異名を述べる *Mv* の四例と *Aṣṭ* の用例を比較しておく。

<i>Mv</i> 1.229	<i>Mv</i> 2.133	<i>Mv</i> 2.284-285	<i>Mv</i> 2.415-416	<i>Aṣṭ</i>
① puruṣanāga	① puruṣanāga	⑧ puruṣanāga	⑥ puruṣanāga	⑭ puruṣanāga
② puruṣasiṃha	② puruṣasiṃha	⑨ puruṣasiṃha	⑦ puruṣasiṃha	⑮ puruṣasiṃha
③ puruṣarṣabha	③ puruṣarṣabha	④ puruṣarṣabha	③ puruṣarṣabha	⑥ puruṣarṣabha
④ puruṣapaduma	④ puruṣadhaura	⑭ puruṣadhaureya	⑭ puruṣadhaureya	⑩ puruṣadhurya
⑤ puruṣapuṇḍarīka	⑦ puruṣapuṇḍarīka	⑫ puruṣapuṇḍarīka	⑪ puruṣapuṇḍarīka	⑫ puruṣapuṇḍarīka
⑥ puruṣadhaureya	⑥ puruṣapaduma	⑩ puruṣapaduma	⑨ puruṣapaduma	⑪ puruṣapadma
⑦ puruṣa		① puruṣa		
⑧ <b>satpuruṣa</b>	⑧ <b>satpuruṣa</b>	② <b>satpuruṣa</b>	① <b>satpuruṣa</b>	① <b>satpuruṣa</b>
⑨ puruṣājāneya	⑤ puruṣājāneya	⑬ puruṣājāneya	⑬ puruṣājāneya	⑬ puruṣājāneya
⑩ anuttara	⑩ anuttara	⑮ anuttara	⑮ anuttara	
⑪ puruṣa- damyasārathi	⑪ puruṣa- damyasārathi	⑯ puruṣa- damyasārathi	⑯ puruṣa- damyasārathi	⑯ puruṣa- damyasārathi
⑫ gatima	⑫ gatima	⑳ gatimatā	㉕ gatimatā	

⑬ smṛtīma	⑬ smṛtīma	⑳ anusmṛti	㉔ smṛtīmatā	
⑭ dhṛtīma	⑭ dhṛtīma	㉑ dhṛtīmatā	㉕ dhṛtīmatā	
⑮ matīma	⑮ matīma			
	⑯ dyutīma			
	⑨ mahāpuruṣa	③ mahāpuruṣa	② mahāpuruṣa	② mahāpuruṣa
		⑤ puruṣadravya	④ puruṣadravya	
		⑥ puruṣaśūra		
		⑦ puruṣavīra	⑤ puruṣavīra	
		⑪ puruṣakumuda	⑩ puruṣakumuda	
		⑰ nīkrānta		
		⑱ vikrānta	⑰ vikrānta	
		⑲ parākrānta	⑱ parākrānta	
		㉒ arthika	㉒ arthika	
		㉓ apramatta	㉓ apramatta	
		㉔ ātāpi	㉔ ātāpi	
		㉕ prahitātma	㉕ prahitātma	
		㉖ vyapakṛṣṭa	㉖ vyapakṛṣṭa	
		㉗ viharanta	㉗ viharanta	
		㉘ buddhimatā	㉘ buddhimatā	
		㉙ prajñāvatā	㉙ prajñāvatā	
		⑧ puruṣaṅga	⑧ puruṣaṅga	
		⑫ puruṣapuṅgava	⑫ puruṣapuṅgava	⑨ puruṣapuṅgava
		⑰ eka	⑰ eka	
		㉚ chandika	㉚ chandika	
				③ atīpuruṣa
				④ puruṣappravara
				⑤ puruṣaśobhana
				⑦ puruṣodāra
				⑧ puruṣaśautīra

*Mv* の第四例 (*Mv* 2.415-416) と般若経ではサットプルシャが第一にあげられるが、それは大乘で satpuruṣa がより重要視されてゆく階梯と見てよいであろう。

また、『三昧王経』第九章でも、この satpuruṣa を含んだリストが見られる<sup>26</sup>。本経では「甚深なる法忍を身につけた(菩薩)が、貪欲と憎しみの対象に惑わされない」といい、その人の尊称として、サットプルシャを含む多くの名を挙げるのである。この中にも *Mv* のリストのほとんどが反映されていると考えられる。

## (2) 六波羅蜜を学習する satpuruṣa

次に『八千頌般若』のもう一つの例として六波羅蜜を学習する

satpuruṣa があげられる。この文脈では、たとえ菩薩乗によって修行する人々でも、中にはこの般若波羅蜜經典を得ながらそれに浸ることなく、思惟しないで捨て去ったり、声聞や独覚の階位を讃えている諸經典を求める者もいる。それらの經典には菩薩乗は讃えられず、自己の制御や静寂 (śamatha)、完全な涅槃を説き、瞑想のための隠遁 (pratisaṃlayanam) を説いている。そして、自分が四沙門果や独覚の悟りを得ることや、現世において完全な涅槃を得ることが説かれている。このようなことが、声聞や独覚の位に結びついていることになるという。そのように心を発することを否定しながら、以下のように述べる。

大乘に進み入った (mahāyānasamprasthitā) 菩薩摩訶薩たちは、大きな甲冑に身を固めているからである。彼らはいかなる時も〔自己の解脱のみを求める〕悩みの少ない〔平静な〕境地に対して、心を発すべきではない。それはなぜかという、彼ら「善なる人々」(satpuruṣa) は世間を導く人々であり、世間を利益する人々だからである (lokapariṇāyakā hi bhavanti te satpuruṣā lokārthakarāḥ)。だから彼らは、つねに、いつでも、六種の完成 (六波羅蜜) について学ばなければならない。(Vaidya ed. [Aṣṭ 1960:116-117])

ここで言うところの satpuruṣa は大乘の菩薩摩訶薩である。そして、彼らは世間を導く人々であり、世間を利益する人々である。そして何よりも六波羅蜜に相応する經典を学ぶものである。このことこそが般若經の強調するところなのである。

(3) 『二万五千頌般若』と大品系漢訳諸本にみる対告衆の satpuruṣa

梵本『二万五千頌』にもとづいて対告衆を整理すると、以下の順に説かれることが判る。

- 1) 五千人の比丘の僧団
- 2) 五百人の比丘尼、在家の男性信者と女性信者
- 3) 〔無量無数の〕菩薩摩訶薩

この 3) 菩薩摩訶薩のなかで、固有名としては、bhadrapāla 以下 maitreya までの二十四菩薩が以下のようにあげられる。

①bhadrapāla, ②ratnākara, ③sārthavāha, ④naradatta, ⑤varuṇadatta, ⑥śubhagupta, ⑦indradatta, ⑧uttaramati, ⑨viśeṣamati, ⑩vardhamānamati, ⑪amoghadarśin, ⑫susamprasthita, ⑬suvikrāntavikrāmin, ⑭nityodyukta, ⑮anikṣiptadhūra, ⑯sūryagarbha, ⑰anupamacintin, ⑱avalokiteśvara, ⑲mahāsthāmaprāpta, ⑳mañjuśrī, ㉑vajramati, ㉒ratnamudrāhastā, ㉓nityotkṣiptahastā, ㉔maitreya

この箇所の大品系漢訳諸本を較べると以下ようになる。

『放光』 (T221, 8, 1 a-b)	『光讚』 (T222, 8,147a)	『大品』 (T223,8,217a-b)	『第二会』 (T2207, 1 c)	PV (K ed., I-1, pp.1-2)
①護諸繫 ②寶來 ③導師 ④龍施 ⑤所受則能説 ⑥雨天 ⑦天王 ⑧賢護 ⑨妙意 ⑩有持意 ⑪增益意 ⑫現無癡 ⑬善發 ⑭過歩 ⑮常應 ⑯不置遠 ⑰懷日藏	①颯陀和 ②羅隣那竭 ③摩訶須菩和 ④那羅達 ⑤嬌日兜 ⑥和輪調 ⑦因坻 ⑧賢守 ⑨妙意 ⑩持意 ⑪增意 ⑫不虛見 ⑬立願 ⑭周旋 ⑮常精進應 ⑯不置遠 ⑰日盛	①颯陀婆羅 ②闍那伽羅 ③導師 ④那羅達 ⑤星得 ⑥水天 ⑦主天  ⑧大意 ⑨益意 ⑩增意 ⑪不虛見 ⑫善進 ⑬勢勝 ⑭常勸 ⑮不捨精進 ⑯日藏	①賢護 ②寶性 ③導師 ④仁授 ⑤星授 ⑥常授 ⑦德藏  ⑧上慧 ⑩勝慧 ⑪增長慧 ⑫不虛見 ⑬善發趣 ⑭善勇猛 ⑮常精進 ⑰不捨輓 ⑱日藏	① bhadrapāla ② ratnākara ③ sārthavāha ④ naradatta ⑤ śubhagupta ⑥ varuṇadatta ⑦ indradatta  ⑧ uttaramati ⑨ viśeṣamati ⑩ vardhamānamati ⑪ amoghadarśin ⑫ susamprasthita ⑬ suvikrāntavikrāmin ⑭ nityodyukta ⑮ anikṣiptadhūra ⑯ sūryagarbha  ⑰ anupamacintin ⑱ avalokiteśvara ⑲ mahāsthāmaprāpta ⑳ mañjuśrī ㉑ ratnamudrāhastā ㉒ nityotkṣiptahastā  ㉓ maitreya  ㉔ vajramati
23	24	22	26	24

(星得は一般的には guhyagupta の訳語であるが、ここでは PV のまま śubhagupta とした)



その他、チベット語訳『二万五千頌般若』の経部（北京版 No.731, 3a5-3b2）では 36 菩薩、論部（No.5188, 3b4-8）では梵本に近い 24 菩薩をあげる。また、『放光』では第一に「護諸繫」、第八に「賢護」をあげ、『光讚』では第一に「颯陀和」、第八に「賢守」とし、重複しているように見える。チベット語訳経部でも第一が bzang skyong (bhadrapāla)、第十が skyong pa'i stobs (bhadrabala) と対応することから、この両者は後に bhadrapala に統一された可能性がある。

このように大品系諸本の間でも相違はあるが、最初に颯陀婆羅 (bhadrapāla) をあげ、最後に弥勒 (maitreya 慈氏) をあげることは共通している。重要なのは、これらの菩薩にはバドラパーラをはじめとする在家の菩薩や、ヴァルナダッタ (水天) のような在家の信者の他、他方世界の ⑱ 観自在 (観世音) 菩薩、大勢至菩薩 (⑲ mahāsthāmaprāpta)、⑳ 文殊菩薩、㉑ 弥勒菩薩といった出家菩薩も含まれ、在家菩薩と出家菩薩を区分していない。すべて菩薩として括られ、[一生] 補處にして尊位を紹ぐ者であるとするばかりである。

ここに satpuruṣa (正士) の語は見られないが、冒頭に挙げられる颯陀婆羅 (bhadrapala) 以下の日藏 (sūryagarbha) までの十六尊は、「十六正士、十六賢士」などとして、他の多くの大乗仏典に登場する有名な菩薩たちである。しかし本経では、まだ十六正士として確立していなかったと考えられる。十六正士については後述するが、上記のリストの中で、日藏までの最初の菩薩が十六菩薩として別立てされた可能性は重視すべきであろう。

また、これら十六正士が『般舟三昧経』の八菩薩から発展したことが、先行研究によって明らかにされている<sup>27</sup>。本経には梵本はないが、最古の支婁迦讖 (179 年) 訳があり、かなり早い段階 (2 世紀頃) にこの伝承が形成されていたようである。本経には善守をはじめ、各菩薩の出自と出身地が明記されているが、その内容は『大智度論』(大正 No.1509,111a) とほぼ同一である<sup>28</sup>。また『十住毘婆娑論』(大正 No.1521, 68c16-17) には「跋陀婆羅菩薩は在家の菩薩であり、頭陀を行ずる。仏はこの菩薩のために般舟三昧経を説けり」とあり、また『観虚空藏菩薩経』(大正 No.409, 679b28) にも「是の八菩薩は般舟中より出ず」と引用されるように、よく知られた伝承であったことがわかる。

## 5. 『法華経』における十六 satpuruṣa

### (1) 対告衆としての satpuruṣa

経典の最初に対告衆を列挙するのは通例であるが、大乘経典の場合、一般的には出家菩薩は文殊菩薩から始まり弥勒菩薩で終わる。しかし、法華経の梵本では、これに獅子菩薩を加えた計二十五菩薩が出家の菩薩としてあげられる。さらに加えて、「賢護を上首とする十六善士」(bhādrapālapūrvamaṅgamaīś ṣoḍaśabhiḥ satpuruṣaiḥ)を伴っていたとし、具体的に bhādrapāla (賢護) から dharaṇīṃdhara (執印) 菩薩までの十六名の在家菩薩の名を挙げ、彼らを始めとする出家と在家の計八万の菩薩がいたとする。

しかし、漢訳では在家菩薩と出家菩薩の区別はなく、『妙法華』、『添品法華経』は十八菩薩をあげ、その中の第十五番目に跋陀婆羅を組み入れている。しかも、最古訳の『正法華』は二十三菩薩を列挙するが bhādrapāla に相当する菩薩名は見られない。

この状況は、先の『八千頌般若』のサットプルシャの異名と等しく、漢訳に較べて比較的新しい文献である梵本にみられるという特徴がある。こうしてみると、賢護を始めとする「十六正士」の伝統は最初期の大乘には知られていなかった可能性がある。

このバドラパーラ等のサットプルシャは、他の大乘経典でも何度か登場する。例えば、『梵天所問経』の十六正士が有名であるが、笈法護 (286年) 訳『持心梵天所問経』を例にとれば、対告衆として、王舎城の竹林精舎に大比丘六万四千人、菩薩七万二千人があり、具体的に文殊 (薄首) を始めとする十五童真 (法王子) と賢護等を上首とする十六正士がいたと説く。

この状況をリスト化すると以下ようになる。なお、参考のために『法華経』の 16 satpuruṣa を比較してある。丸数字は出典の記載順である。

法華経梵本	持心梵天所問経	思益梵天所問経	勝思惟梵天所問経	『二万五千頌般若』PV
① bhādrapāla	① 賢護	① 跋陀婆羅菩薩	① 跋陀婆羅菩薩	① bhādrapāla
② ratnākara	② 寶事	② 寶積菩薩	② 寶積菩薩	② ratnākara
③ susārthavāha			③ 善將導菩薩	③ sārthavāha
④ naradatta	③ 恩施		④ 人徳菩薩	④ naradatta
⑤ guhyagupta		③ 星徳菩薩	⑤ 普護徳菩薩	⑥ śubhagupta*

⑥ varuṇadatta	⑤水天	⑤水天菩薩	⑥大海德菩薩？	⑤ varuṇadatta
⑦ indradatta	④帝天	④帝天菩薩	⑦帝釋王德菩薩	⑦ indradatta
⑧ uttaramati	⑥賢力〔士〕	⑥善力菩薩		⑧ uttaramati
⑨ viśeṣamati	⑦上意	⑦大意菩薩	⑧上意菩薩	⑨ viśeṣamati
⑩ vardhamānamati	⑧持意	⑧殊勝意菩薩	⑨勝意菩薩	⑩ vardhamānamati
⑪ amoghadarśin	⑨増意	⑨増意菩薩	⑩増上意菩薩	⑪ amoghadarśin
⑫ susaṃprasthita	⑪不慮見	⑪不慮見菩薩	⑪不空見菩薩	⑫ susaṃprasthita
⑬ suvikrāntavikrāmin	⑩善建	⑩善發意菩薩	⑫善住菩薩	⑬ suvikrāntavikrāmin
⑭ anupamamati	⑬善導	⑬導師菩薩	⑬善奮退菩薩	⑭ anupamamati
⑮ sūryagarbha	⑬不損意	⑬不少意菩薩	⑭無量意菩薩	⑮ sūryagarbha
⑯ dharanīṃdhaṇa	⑮日藏	⑮日藏菩薩	⑯日藏菩薩	⑯ dharanīṃdhaṇa
	⑯持地	⑯持地菩薩	⑰持地菩薩	⑰ dharanīṃdhaṇa*
	⑱不置遠？	⑱不休息菩薩	⑱不休息菩薩	⑱ anikṣiptadhūra
Saddharmapuṇḍarīka-sūtra, Kern Nanjyo edition	竺法護訳『持心梵 天所問經』 (T585.15.1a16-19)	鳩摩羅什訳『思益梵 天所問經』 (T586.15.33b9-13)	菩提流支訳『勝思 惟梵天所問經』 (T587.15.62b12-17)	Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā, ed. by T. Kimura, vol. I -1, p.1, 1.32-p.2, 1.3.
賢護を上首とする16セット ブルシャ (bhadrapālapūrvagamaīś śoḍaśabhiḥ satpuruṣaiḥ)	賢護之等十六正士	跋陀婆羅等十六賢 士	跋陀婆羅等上首。 十六大賢士	対告衆24菩薩のうちの 初めの17菩薩に対応す る。ただし、⑭ nityodyukta(常精進) は対応しない。

法華経梵本では、その対告衆では、文殊を始めとして獅子菩薩までの二十五菩薩のうちの第⑳ dharanīdhara として登場する。一方、これに続いて十六正士が語られるが、その最後は⑯ dharanīṃdhaṇa (持地) である。よく似た名前は、dharanīṃdhaṇa は dharanī-ṃdhaṇa (ダーラニーを燃料とする) で、dharanīdhara (ダーラニーを保つ) とは異なった意味である。

この表のように十六正士のメンバーはおよそ固定しているが、竺法護(286年)訳『持心梵天所問經』で①賢護と⑥賢力をあげ、鳩摩羅什(402年)訳『思益梵天所問經』でも①跋陀婆羅と⑥善力となっているのが、菩提流支(518年 or 536年)訳『勝思惟梵天所問經』になると⑥に対応する菩薩名は欠落している。

このことは、『放光』の①護諸繫と⑧賢護、および、『光讚』の①跋陀和と⑧賢守と重ねて見ていたが、『大品』になると⑧に対応する菩薩名がなくなって①跋陀婆羅に統一される。これと同じ傾向が指摘できる。

おそらく、もともとは bhadrapāla と bhadrabala の別があったのであるが、やがて bhadrā が混在しているということで、bhadrapāla に統一

されていたのであろう。Bhadrapāla と bhadrabala の両者があったことは、チベット語訳『二万五千頌般若』(北京版 No.731) ① bzung skyong (bhadrapāla) と⑩ bzung po'i stobs (bhadrabala) でも確認できる。このような菩薩のメンバーが、次第に整理され、出家者の菩薩として確立していったのであろう。

## 7. 六十名の菩薩と十六名の satpuruṣa

十六名の正士という表現が確立すると、さらに出家の菩薩を別立する意識が高まり、六十名の菩薩と十六名の正士という表現が成立する。たとえば、『三昧王経』では、ブツダの説法の會座に集まる対告衆にいる八十の百万倍という菩薩を、次のように描く<sup>29</sup>。

1. すべて一生補処の菩薩であり、不退転の菩薩  
メールをはじめとする 36 の菩薩の名前が挙げられる。おそらく他方世界の菩薩。
2. アジタ菩薩(弥勒)をはじめとするバドラ・カルパ(賢劫)のすべての菩薩摩訶薩で、文殊をはじめとする 60 名の菩薩
3. そこにはバドラパーラに率いられた 16 人のサットプルシャたちも一緒にいた。

また『護国菩薩所問経』(*Rāṣṭrapālapariṣṭhā*) (RP と略) にも十六の善士と 60 名の菩薩という定型句が説かれる。漢訳で言えば、もともと闍那囉多訳『護国菩薩経』(大正 No.321) があり、これを菩提流支(706～713)が『大宝積経』(大正 No.310)「護国菩薩会」第十八会に収録したものである。

本経の対告衆の菩薩としては、最初の普賢菩薩から陀羅尼自在菩薩までの五千人の菩薩と、文殊を上首とする「無比の心を持った 60 名の菩薩摩訶薩」(*mañjuśrīpūrvaṃgamaīś ca ṣaṣṭibhir anupamacittaiḥ*)、これに「賢護を上首とする 16 名の善士」(*bhadrapālapūrvaṃgamaīś ca ṣoḍaśabhiḥ satpuruṣaiḥ*) が別に記されている<sup>30</sup>。

漢訳でも「文殊師利等六十不思議菩薩。賢護等十六菩薩。如是等菩薩：摩訶薩五千人俱」(『大宝積経』菩提流志訳 大正 No.310.11.457b17-18) と同じであるが、これらはすべて菩薩であり、あわせて五千人の菩薩摩訶

薩であることを明記している。

また、『三昧王経』(Samādhirājasūtra)では、巨大な数の比丘サンガと菩薩のサンガが説かれるが、そこでは三種類の菩薩が区分される。一つはメール(meru)菩薩から常不畏施(satatamabhayaṃdadāna)菩薩までの37菩薩、二つ目はアジタ(弥勒)菩薩を上首とするすべての賢劫の菩薩(ajitabodhisattvapūrvamaṅgamaīś ca sarvair bhadrakalpikair bodhisattvair mahāsattvaiḥ)、三つ目は文殊を上首とする60名の無比の心を持つ菩薩(mañjuśrīpūrvamaṅgamaīś ca śaṣṭibhir anupamacittaiḥ)が列挙される。そして「そこには、賢護を上首とする16名の善士を(bhadrapālapūrvamaṅgamaīś ca ṣoḍaśabhiḥ satpuruṣaiḥ) [伴っておられた]」とする。ここでは菩薩と善士は別のグループとされているが<sup>31</sup>、文殊のグループに対する形容句もRPと一致する。このように菩薩は中期大乘にいたって、文殊を始めとする出家菩薩と賢護等を始めとする十六のsatpuruṣa というように、定型的に表現されるようになった。

また、『法華経』<sup>32</sup>をはじめ『善勇猛般若経』、『大法鼓経』、『寂照神変三摩地経』などに見られる五百菩薩を率いる bharapāla の伝承は、『大乘菩薩藏正法経』・『大宝積経』(「被甲莊嚴会」第七)・『大方等大集経賢護分』などのように、賢護は王舎城の優婆塞、或いは長者で、五百の優婆塞や長者を率いていた、すなわち「在家者のリーダー」という説が固定していったのであろう。

## 8. 結論

サットプルシャは初期仏教の中ではブツダ、あるいはすぐれた比丘の呼称である。時には在家の篤信者という意味で用いられる場合も稀にはあったが、それは例外と言えよう。それはまさに、「高貴なる真実の人」という意味で用いられていたのである。

北方アビダルマになると預流、あるいは不還の聖者と見做すようになり、修行階梯の細分化と共に、七種のサットプルシャが考察された。しかし仏とその弟子という見解も引き続き見られたのである。

一方、部派仏教以降になり、ブツダの神格化と崇拜がさらに高まり、前世のブツダ、すなわち菩薩として尊崇されるようになった。これと同

じように、サットプルシャもブツダ観の変遷にしたがって変化していった。たとえば *Mv* の燃灯仏崇拜に見られたように、サットプルシャは、将来成道する菩薩と同一視され、菩薩としての特性を付与される。ブツダ或いは菩薩の呼称の特殊化などもそれを物語るものである。

初期大乘ではこの「菩薩としてのサットプルシャ観」を継承し、次第に多くの菩薩の中でも特別視するようになる。その段階を般若経の伝統で見ると、颯陀婆羅 (bhadrāpāla 賢護) は多くの菩薩の一人に留まっていたが、次第に菩薩の代表として最初に掲げられるようになった。そして、在家にして不退転で一生補処の菩薩という性格が付与されるようになるが、般若経では最後まで出家と在家の菩薩グループという分化は見られない。

一方、『般舟三昧経』や『大智度論』に見られるように、現前にブツダを見る瞑想を実践する菩薩たちは、八菩薩として具体的な出自と共に重要視される。その伝承がさらに発達して、法華経梵本のように、文殊や弥勒を代表とする出家の菩薩と、賢護を代表とする在家の菩薩に分化し、十六正士というサットプルシャ伝承が、多様な信仰と結びつき、多くの経典の中で説かれるようになった。在家者の代表である賢護が、五百人の菩薩、優婆塞、長者などのリーダーと見なされるようになったのもその展開の一つである。

さらに、「文殊を代表とする出家の六十菩薩」と「颯陀婆羅を代表とする在家の十六菩薩」という定型的表現も定着するように、大乘仏教ではサットプルシャを在家者側の代表として位置づけ、その伝承を担う理念的な存在にまで昇華させたのである。

#### <注>

\* 本稿は渡辺章悟 [2018.12] に発表した簡略な原稿にもとづいており、その原稿作成の際に削除した箇所や脚註などを補った完全版であることを断っておく。

<sup>1</sup> *MN*ではsappurisaはasappurisaと対比して用いられる (*MN* III, pp.37-45)。漢訳「真人経」『中阿含経』(大正1, 561a)、「是法非法経」『中阿含経』(大正1, 837c-839a)

<sup>2</sup> なお、「善人往経」『中阿含経』(大正1, 427a-428c)で説かれる「七善人」の善人は、sappurisaではなく、単にpurisaである。また『増支部』*AN*, IV purisagati, pp.70-74も参照されたい。

<sup>3</sup> 本頌は『俱舍論』「世間品」第三章 (*AKBh*, p.168, II.21-22, のsatpuruṣaに引用される。

<sup>4</sup> 同様の用例は『スッタニパータ』にも見られる。「あたかも城門の外に立つ柱が地中に打ち込まれていると、四方からの風にも揺るがないように、そのように諸々の聖なる真理を観察してみる善き人 (sappurisa) はこれに譬えられる、と私は言う。この勝れた宝はサンガの中にある。この真理によって幸いあれ。」(Sn 40, Vers 231)

<sup>5</sup> MN 3.37ff.

<sup>6</sup> この定型的用例はMN1-300, 310, 434, SN 3.165等に見られる。

<sup>7</sup> 『俱舍論』によれば、三つの結合 (saṃyojana 結) とは、十随眠 (anuśaya) のうちの三見 (drṣṭi)・二取 (parāmarśa)・疑 (vicikitsā) の三つを指す。この煩惱の滅除によって、預流果に入る。Cf. *AKBh*, V. 3, ed. Pradhan, p.279, ll.350-351.

<sup>8</sup> SN 5.347, 404.

<sup>9</sup> AN 4.12ff, 4.70ff, 4.146ff.

<sup>10</sup> 全超 (pluta) とは、梵衆天から死没して直ちに色究竟天に生まれる。半超 (ar-dha-pluta) とは、淨居天に生まれてから色究竟天に入る。遍没 (sarvacyuta) とは、他のすべての天界を経めぐってから、色究竟天に入る。櫻部健・小谷信千代訳 [1999: 244-245] 参照。

<sup>11</sup> 「親近善士者。謂親近善友。善友謂佛及佛弟子。〔中略〕此中具顯四預流支。謂親近善士乃至法隨法行(『阿毘達磨大毘婆沙論』大正27.223b28-c13)「阿毘達磨諸論師言。以信戒分別親近善士。以聞及慧分別聽聞正法。以正見分別如理作意。以餘分別法隨法行。(同487a27-29)

<sup>12</sup> Vaidya[1961].

<sup>13</sup> 本経は那連提耶舍訳(557年)『月灯三昧経』(大正15, No.639)、先後訳(5世紀前半)『月灯三昧経』(大正15, No.640)があり、その内容も大きく異なるが、原型は紀元二世紀頃に成立していたと考えられている。引用した箇所は『月灯三昧経』でいうと「親近〔於〕善人」(550a18, 611b27, 617b28, 618b24)、「親近善知識」(553a13, 570c21)の六箇所あるが、特に「謂善入過彼諸有故。云何名親近善人與共同事。所謂親親諸佛菩薩聲聞故。」(617b28-29)、あるいは「云何親近善人。所謂近諸佛故。」(618b23-24)とするように、親近するのは諸佛、或いは菩薩、声聞」としている。Cf.[SR 299]

<sup>14</sup> 「若離四法得涅槃者無有是處。何等爲四。一者親近善友。二者專心聽法。三者繫念思惟。四者如法修行。」曇無讖譯『大般涅槃經』(大正12, 510b19-22)

<sup>15</sup> 「若諸菩薩親近善士。聽聞正法 如理作意。為因緣故轉劣意樂成勝意樂。」(『解深密經』大正16, 705b24-25)

<sup>16</sup> āryamahāsāṃghikānāṃ lokottaravādināṃ madhyadeśikānāṃ pāṭhena vinayapiṭakasya mahāvastuye ādi // (Mv: 2)

<sup>17</sup> Mvの翻訳については平岡[2010]を参照した。

<sup>18</sup> tasya ca dharmasaṃyuktam bhāvaye puruṣottamaḥ / kuśalam sarvasatvānāṃ buddhadharmaviśāradaḥ //

so taṃ dharmam vijānitvā rājā parijanañ saha / trīṇi saṃyojanāṃ tyaktvā prāptavāṃ prathamam phalam //

asaṃkhyeyā ca janatā prāptavāṃ prathamam phalam / paśya satpuruṣā rājam maitriyā balam uttamaṃ //

ye tatra nirmitā bhikṣūḥ na caite bhikṣuṇo matā / upahāram vadanty etaṃ jinā śāstraviśāradaḥ // [Mv 1.192]

<sup>19</sup> Cf. 註7

<sup>20</sup> sarvehi etehi viṃśadbhiḥ sarvadharmaviśārādā / samanvitā satpuruṣā śubhair adhyāśayair varā iti // imehi khalu bho dhutadharmadhara bodhisatvā viṃśadbhir adhyāśayaḥ samanvāgatā bhavantīti // (*Mv* 1.89)

<sup>21</sup> デーヴァグッタをasatpuruṣaとするのも、ブツダとの対比で言われているのである。(Cf. *Mv* 1.132)

<sup>22</sup> 他にも、大名声を博する人 (mahāyaśas)、天人の最高者 (devamanujāna uttama)、支配者 (niḥśaraṇam)、人天の主 (nātha marumanuṣyāṇām)、卓越した人 (naralambaka)、偉大なる有情 (mahāsatva)、偉大なる威光を持つもの (mahātejā) 偉大なる威厳を持つもの (mahādyute)、偉大なる腕を持つもの (mahābāhu)、人天の主 (marumanuṣyāṇām nātha)、論者の獅子 (vādiśārdūla, vādisiṃha)、すべての疑念を断つ者 (sarvasaṃśayasūdana)、最高なる導師 (nāyakavara)、最高なる人 (naravara)、最上なる人 (narottama) 等多くある。

<sup>23</sup> Vaidya[SR 1961:188, 289]にはekakṣaṇasamāyuktayā prajñayāという表現が二度見られるように、成道に結びつく三昧の一瞬の智慧を指している。

<sup>24</sup> 梵文の下線部に対応する箇所のみを挙げると以下ようになる。「①人中尊。②人中善士。③人中豪貴。④人中牛王。⑤人中蓮華。⑥人中龍象。⑦人中師子。⑧人中勇健。⑨人中調御。⑩中英傑。」(「第四会」大正七、八二七下)、「①人中尊。②人中善士。③人中龍象。④人中蓮華。⑤人中調御。⑥人中勇健。」(「第五会」大正七、九〇二上)、「在家菩薩是名①正士。亦名②大丈夫。亦名③可愛士夫。亦名④最上士夫。亦名⑤善相士夫。亦名⑥士夫中樞。亦名⑦吉祥士夫。亦名⑧士夫中衆色蓮華。亦名⑨士夫中白蓮華。亦名⑩士夫正知者。亦名⑪人中龍。亦名⑫人中師子。亦名⑬調御者。」(『仏母』大正8, 642c)。このように「第四会」は10名、「第五会」は6名、『仏母』は13名であり、梵文とは異なる。

<sup>25</sup> *Mv*(2.415-416)は*Mv*の四リストの中で唯一、第一にsatpuruṣaをあげる。また、*Asṭ*のリスト16名のうち11名を含み、その配列も*Asṭ*のリストの最も近い。

<sup>26</sup> Vaidya[SR 1961: 44]参照。

<sup>27</sup> 渡辺[1981], 田中[2012].

<sup>28</sup> 林[1994:3-6]によれば、第三の星得はguhaguptaである。また第五にはカピラヴァストゥ出身のsuśīma菩薩とanāthapiṇḍada居士、第七にコーサーンビー出身のindradattaを挙げる。

<sup>29</sup> 漢訳では「如是我聞。一時婆伽婆住王舍城耆闍崛山。與大比丘眾百千人俱。菩薩八十那由他皆一生補處。阿氏多菩薩摩訶薩而為上首。」(『月燈三昧經』大正vol.15, 549a6-8)とあるように、菩薩の固有名は阿氏多(アジタ)以外には掲載されない。ましてヤサンスクリット本のような、バドラパーラを上首とする十六のサットプルシャの記載は見られない。

<sup>30</sup> Vaidya[RP 1961:120]

<sup>31</sup> Vaidya[SR 1961:1]また那連提耶舍譯『月灯三昧經』では「如是我聞。一時婆伽婆住王舍城耆闍崛山。與大比丘眾百千人俱。菩薩八十那由他皆一生補處。阿氏多菩薩摩訶薩而為上首」(大正15, 549a6-8)のように、bhadrapālaに関する記述は見られない。

<sup>32</sup> 『妙法蓮華經』「今此會中跋陀婆羅等五百菩薩」(大正9, 51b3)。なお、この『法華經』の教説が最澄の『山家學生式』「跋陀婆羅等五百菩薩。皆是在家菩薩。法華經中。具列二種人。」(大正74, 625b10)や円山道白の『禪戒訣』「法華經列二種菩薩。文殊菩薩彌勒菩薩等皆出家菩薩。跋陀婆羅等五百菩薩皆是在家菩薩。」(大正82, 616b25-26)など日本仏教にも影響しているのである。



## &lt;略号&gt;

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. (rev. 2nd ed.). Ed. P. Pradhan. Patna: K.P. Jayaswal Research Center, 1975.
- AN *Aṅguttaranikāya* (増支部)
- Aṣṭ *Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā* (Buddhist Sanskrit Text 4)  
Ed. by P. L. Vaidya. Darbhanga: the Mithila Institute, 1960.
- Dhp *Dhammapada* (法句経)
- MN *Majjhimanikāya* (中部)
- Mv *Mahāvastu-Avadāna*. Ed. by Émile Senart, 3 vols., Paris 1882-1897.
- PV I -1 *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā I-1*, Tokyo: Sankibo Busshorin 2007.
- PV I -2 *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā I-2*, Tokyo: Sankibo Busshorin 2009.
- RP *Rāṣṭrapālāpariṣṭhā* (Buddhist Sanskrit Texts, 17). Ed. P. L. Vaidya. Darbhanga: the Mithila Institute, 1961. In P. L. Vaidya ed., *Mahāyānasūtrasaṃgraha*, Part I (Sutra No. 12).
- SN *Samyuttanikāya* (相應部)
- Sn *Suttanipāta* (経集)
- KN *Saddharmapuṇḍarīka* (Bibliotheca Buddhica 10). Ed. H. Kern and Bunyiu Nanjio. St.Petersburg, 1909-1912.
- SP *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (Buddhist Sanskrit Texts 6). Ed. P. L.Vaidya. Darbhanga: the Mithila Institute, 1960.
- SR *Samādhirājasūtra* (Buddhist Sanskrit Texts 2). Ed. P. L. Vaidya. Darbhanga: the Mithila Institute, 1961.

## &lt;参考文献&gt;

- 櫻部健・小谷信千代訳 [1999] 『俱舍論の原典解明 賢聖品』法蔵館.
- 田中公明 [2012] 「大乘仏教在家起源説再考—『般舟三昧経』の八菩薩と十六正士を中心に—」『印仏研究』61-1:171-176(L).
- 林純教 [1994] 『藏文和訳般舟三昧経』大東出版社.
- 平岡聡 [2010] 『ブツダの大いなる物語 梵文マハーヴァストゥ全訳』上・

下、大蔵出版.

渡辺章悟 [1981]「対告衆としての Satpuruṣa」『東洋大学大学院紀要〔文学研究科〕』18: 1-14(L).

渡辺章悟 [2003]「悟りへの一瞬の智慧」『仏教の修行法 阿部慈園博士追悼論集』春秋社.

渡辺章悟 [2012]「般若経の成立過程—智の展開を中心として」『経典とは何か (二) —経典の成立と展開受容』日本仏教学会編、平楽寺書店.

渡辺章悟 [2017]「説法師 (dharmabhāṅaka) 考」『印仏研究』66-1:89-95(L).

渡辺章悟 [2018]「大乘仏典の伝承者 — dharmabhāṅaka (説法師) の位置づけ」『国際哲学研究』7:63-79.

渡辺章悟 [2018.12]「大乘仏教の伝承者たち—satpuruṣa をめぐって」『印仏研究』67-1 (pp.1-11(L))

<キーワード> *Mahāvastu*, 『八千頌般若』、菩薩、サットプルシャ、サップリサ、十六正士